

指揮者紹介

Conductor

山川 茂

(当団常任指揮)



滋賀県在住。大阪芸術大学芸術学部音楽学科中退。高校時代から指揮を始め、指揮法を橋本久喜氏に師事。現在、甲西吹奏楽団常任指揮者、フレイルム・プラスバンド首席指揮者、フェアリープラスバンド神戸音楽統括指揮者、大垣プラスカンパニー常任指揮者、滋賀県立八日市高等学校吹奏楽部常任指揮者を務める。その他にも関西圏を中心に、吹奏楽・プラスバンド・オーケストラの各ジャンルにおいてトレーナー及び指揮者として活動中。

ソリスト紹介

チェロ独奏

日野 俊介



京都市立芸大卒業。京都音楽協会賞受賞。神戸室内合奏団(現・神戸市室内合奏団)、大阪センチュリー交響楽団(現・日本センチュリー交響楽団)、いづみシンフォニエッタなどを経て、現在は関西フィルハーモニーにて特別客演首席奏者として活躍する。昨年5～6月には、同楽団のヨーロッパ公演に参加した。一方、フリー奏者としても活動。関西をはじめ、地方の楽団などでも数多く客演を務める他、ソロや室内楽にも意欲的に取り組み、アフター・アワーズ・セッション他多くの団体で活発に活動する。神戸市出身、京都市在住。

神戸アンサンブルソロイスト

1994年8月、音楽仲間10余名が集い「バロックから現代まで」「テーマある演奏会プログラム」をモットーに活動を開始。1996年の第1回演奏会「モーツァルト」をテーマに好評を博し、その後団員を増やしながらかつ活動を続け、第31回定期演奏会より山川茂を常任指揮者に迎えて新たな活動へ取り組んでいます。経歴、職業は多岐にわたりますが、一人一人が音楽を愛し、アンサンブルを楽しみ、人と人との「和」を重んじる音楽集団です。

団員募集のお知らせ

神戸アンサンブルソロイストでは、団員を募集しています。私たちと一緒にオーケストラを楽しみませんか？楽器経験者で、積極的に練習に参加できる方、お待ちしております。どうぞお気軽にご連絡、ご参加ください。みなさまのお越しをお待ちしております。小さなお子様と同伴での練習も可能です。一度、お問い合わせください。

- 募集パート：弦楽器 Vn(若干名)、Va、Vc、Cb
- 練習日：隔週日曜日
- 練習場所：神戸～尼崎市内
- 団費：2,000円/月(夫婦団員、家族団員、学生の割引制度あり)
- ご連絡先：ホームページからご連絡ください。

出演者紹介

(50音順、☆は賛助出演者、*は今回休演の団員)

Concertmistress

加藤 洋子

Violin

上野 修*

大北 恵里奈*

大森 千亜希

岡田 和也

川喜多 直子

工藤 梨紗子*

島崎 遥*

高岡 由佳

高橋 智子

辻 知里

寺尾 乃生栄

中村 友紀奈

長谷川 美佳

植原 菜穂☆

梶 美知代☆

白幡 淳一☆

新村 友美子☆

寺田 容子☆

中尾 みちる☆

中谷 真佐子☆

中村 真貴子☆

三輪 靖雄☆

矢口 弘樹☆

Viola

石作 真美

梶原 彰真*

杉原 伸吾

布引 信

松本 尚美*

岡崎 篤之☆

白石 雅也☆

馬場 香澄☆

牧野 貴佐栄☆

Violincello

岡 晋一

工藤 瑞生*

船木 晶子

藤原 陽花

本 勇二

白井 吾一☆

藤原 克匡☆

三木 恵理☆

山崎 貴士☆

Contrabass

岡田 夏奈☆

木邨 哲也☆

服部 悠里☆

濱野 剛至☆

深井 祥平☆

矢野 祥子☆

Flute

奥田 未記子

里見 暢子

三輪 啓子

Oboe

浦本 佳子

中川 ふみよ

本多 麻子

Clarinet

後藤 幸子*

杉澤 悠貴

乗鞍 洋一郎

Bassoon

末岡 久直

瀬尾 哲也

本多 勝

Horn

浅尾 純子

杉村 由美子

中嶋 ひかり

深田 初

Trumpet

竹内 砂智

藤田 幸治

村上 和史☆

Trombone

藤澤 恵子☆

富樫 芳彦☆

兪 和俊☆

Tuba

大塚 耕平☆

Timpani

たつみ ひとし

BD/Tamtam

澄川 竜哉☆

Cymbal

片野 里香☆

神戸アンサンブルソロイストホームページ <http://soloists.info/>



神戸市芸術文化活動助成金対象事業

CLASSIC
KOBÉ ENSEMBLE SOLOISTS

神戸アンサンブルソロイスト
第37回定期演奏会

パンデミックを越えて

TCHAIKOVSKY
Symphonie
Pathétique

in B Minor, Op.74

ELGAR
Concerto for Cello
and Orchestra

in E Minor, Op.85

チェロ独奏

日野 俊介

関西フィルハーモニー管弦楽団
特別客演首席奏者



SCHUBERT
Rosamunde
Prinzessin von Zypern



常任指揮者
山川 茂

コロナ感染防止対策
～会場でのお願い～

- ① マスクをご準備いただき、必ず着用ください。
- ② お客様同士、密にならないようできるだけ間隔を空けてご着席ください。
- ③ 会場内ではマスクを常時着用し、咳エチケット、こまめな手指消毒、手洗い、ソーシャルディスタンスにご協力ください。
- ④ プレゼントの受付は設けておりません。また、終演後のロビーでのお見送りは遠慮させていただきます。

ご挨拶

本日は神戸アンサンブルソロイスト第37回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

今回は『パンデミックを越えて』と題し、感染症と関連ある作品を選びました。現在なお苦しい社会情勢ですが、人類は常に苦境を乗り越えてきました。明けぬ夜がないことを確認したい、という思いでの選曲です。

また、今回の演奏会では、協奏曲のソリストに、関西フィル特別首席チェロ奏者日野俊介先生をお招きしています。2016年の第29回演奏会以来の共演。あの時のドヴォルジャークには、「この時間が終わってほしくない…」と思いました。あの幸福な時間が再度体験できるのかと、とても楽しみです。

末尾になりましたが、今回も皆さまのご入場に際しては、ご不便をおかけしていることをお詫び申し上げます。少しでも早く「夜が明けた」と喜びあえる日が来ることを祈り、ご挨拶させていただきます。

神戸アンサンブルソロイスト 団長 本多 勝

あれは2019年春のこと。

まだコロナ禍も知らない平和なあの頃。とある打ち合わせ(という名の飲み会)にて、二人の男が熱く語り合っていた。

二人の男とは、第29回定期演奏会にてドヴォルザークチェロ協奏曲でタッグを組んだ我が常任指揮者と本日のソリスト。また一緒にできたらいいですね、次は何をやりたいですか?と、語りかけるマエストロに、エルガーどうでしょう、と微笑みながら答えるソリスト。

くしくもソリストは高校の先輩でもある。次の演奏会でできるだろうか。と思うものの、その後コロナによる活動休止、演奏会中止に見舞われるなんて思ってもいないことだった。ソリストを迎えて、中止なんてことはしたくないと、タイミングを伺いながら、温めに温めた本企画を(後輩の立場を大いに利用して?)本日遂に実現。

紳士で優しい表情の奥にある情熱に溢れた日野氏の奏でるエルガーを存分にお楽しみあれ!

神戸アンサンブルソロイスト 演奏会実行委員長 高岡 由佳

Program

F.シューベルト

ロザムンデ(魔法の豎琴)序曲 (演奏時間約10分)

E.エルガー

チェロ協奏曲 ホ短調 (演奏時間約30分)

- I. Adagio - Moderato
- II. Lento - Allegro molto
- III. Adagio
- IV. Allegro - Moderato - Allegro, ma non troppo

1楽章と2楽章の間は休止せず続けて演奏します

休憩 (15分)

P.I.チャイコフスキー

交響曲 第6番 口短調 悲愴 (演奏時間約50分)

- I. Adagio - Allegro non troppo - Andante - Moderato mosso - Andante - Moderato assai - Allegro vivo - Andante come prima - Andante mosso
- II. Allegro con grazia
- III. Allegro molto vivace
- IV. Finale. Adagio lamentoso - Andante - Andante non tanto

3楽章と4楽章の間は休止せず続けて演奏します

演奏曲目解説

ロザムンデ(魔法の豎琴)序曲

/ F.シューベルト (1797~1828)

シューベルトの『ロザムンデ』序曲。その成立はチョット複雑です。1823年に依頼された劇伴奏音楽の中の一曲ですが、序曲が初演に間に合わず、初演では旧作の序曲が転用されました。その後さらに別の旧作(1820年作曲の劇伴奏音楽『魔法の豎琴』)の序曲に差し替えられ、現在の形に収まりました。

『キプロスの女王ロザムンデ』の台本は女流作家シェジー作。彼女がウェーバーと組んだ歌劇『オイリアンテ』が不評だったことで、名誉挽回を狙って書いた新作でした。ですが『ロザムンデ』も不評に終わり、台本もすぐ行方不明に。20世紀後半に再発見されましたが、実に一世紀半の間、シューベルト作の音楽(劇は不評でしたが音楽は好評だった)が使われている場面は全く不明だったのです。

さてシューベルトも感染症で亡くなっています。そのう…。言い難いのですが、梅毒で。更に具体的な死因は、その治療薬に用いられた水銀の中毒だと言うことです。

恋人との甘い時間に、幸福の青い鳥を見ていたのでしょうか…。彼の肩に停まっていたのは、凶兆と言い伝えられるカササギだった、というオチでございました。(パンフレット表紙をご参照ください)

チェロ協奏曲 ホ短調

/ E.エルガー (1857~1934)

エルガーのチェロ協奏曲は1918年の作品。この当時はスペイン風邪が猛威を奮っていましたし、不況が戦乱を呼び、第一次世界大戦へと拡大した。そんな不穏な時代でした。21世紀のこの数年の話、と言われても不思議ではない、繰り返す歴史ですね。自身の体調も悪く、死を見つめた結果なのでしょう。慟哭や哀惜もありますが、美しい思い出を慈しむ眼差しが優しく感じます。死の床でもこの協奏曲の旋律を好んでいると語っていました。「大好きなあの丘(パンフレット表紙参照)でこの旋律が口笛で聞こえたら、それは僕だよ」と。

協奏曲では珍しい四楽章制ですが、晦渋な表情の第一楽章と、急速で技巧的な第二楽章は切れ目なく続きます。結果、協奏曲定型の三楽章制のような外見になっています。第三楽章はほぼほぼ弦楽合奏の、柔らかく美しい音楽。第四楽章は古典協奏曲でもよくある Rond 風の始まりですが、前楽章までの主題を回帰させて、全曲を統合しています。

余談ですが、この作品から二年後、エルガーは夫人を喪います。エルガーと言えば、と言うほど有名な『愛の挨拶』は、婚約の記念に(後に言うところの)アリス夫人に贈られた作品でした。

エルガーの愛妻家ぶりは有名で、死別した時の落ち込みの激さが伝わっています。幸福なコマドリ夫婦でした。…って、オシドリ夫婦とコマドリ姉妹が混じりましたね。幸福を運ぶと言いつたコマドリ。パンフレット表紙で、日野先生の傍らに。

交響曲 第6番 口短調

/ P.I.チャイコフスキー (1840~1893)

チャイコフスキーの直接的な死因はコレラでした。のっけから不穏な書き出しですが、古い音楽ファンには、自決のために、コレラ罹患を

覚悟の上で生水を摂取したのだ、そう憶えておいでの方が多いかも知れません。私もそう思ってきました。自決を覚悟する、その理由がある。「一昔前の音楽ファン」である我々はそう信じ込まされてきましたが、最近の研究では、この風説は、順番が逆なのだとの説もあります。単純に、チャイコフスキー自身は翌シーズンの予定を入れていた事実が判明しています。いわく、本人は自分が死ぬとは考えていなかったはずだと。

「チャイコフスキーほどの有名人が」「コレラで死んだ」、この事実は、当時のロシアでは大変なスキャンダルになりました。確かにコレラは大きな社会問題になっていましたが、煮沸消毒した水しか飲まない上流階級の人物が罹患することは稀でした。「コレラ=貧民層の病気」と言う認識が当時のロシアの常識だったのです。

「意図もなく生水を飲む筈がない」との憶測から、「同性愛の発覚(正教国の帝政ロシアでは、刑罰を伴う犯罪)によって自決を選んだ、または強要された」とのウワサが信じられた模様です。根も葉もないとも言えないのですが、モチロン真相はもう闇の中です。

さて交響曲第六番『悲愴』は、彼の死の年となった1893年に作曲・初演されました。ご承知の方も多いでしょうが、この初演の9日後にチャイコフスキーは死去しています。

第一楽章はチャイコフスキー最大の魅力、甘く焦がれる旋律美でイッパイです。**第二楽章**は優美なワルツですが、五拍子でどこか不安定。その揺らぎもまた魅力だと思っています。**第三楽章**は、唯一強音で終わります。無窮動なスケルツォ風に始まって、高揚感のある行進曲へ。とても壮大に終わるので、交響曲全体が終わったと誤解されて拍手が起こったり。僕もやっちゃったコトあり。**第四楽章**は独創的で特に自信がある、とチャイコフスキーは語っていたそうです。遅い終楽章だけでも当時では革新的だったでしょうし、オーケストレーション上の実験も数々あって、深い音色を生み出しています。

深い諦感を語る作品ですが、自決前の遺書として書かれたには、意欲的に過ぎると考えます。

(解説:本多 勝)
© KOBE ENSEMBLE SOLOISTS. 2022

神戸アンサンブルソロイストでは、幅広い年齢のお客様に音楽を楽しんでいただきたいという考えから演奏会への未就学児の入場を制限しておりません。御理解いただけますと共に、小さなお子様をお連れのお客様につきましては、周囲のお客様への十分な御配慮をお願い致します。